



「第二次日本経穴委員会」便り

～第32回 五臓の兪募穴と五行～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 うらやまひさつぐ 浦山久嗣

はじめに

現在、本委員会は、WHO西太平洋地域事務局の要請を受けて、WHO版(英語版)標準経穴の文書に添付するイラストの作成を行っている。各経穴条文の内容を反映し、同時に全体的な整合性を満たす図版を作成することは予想以上に難しい。この夏の出版に合わせて、作業は急ピッチで進められているものの、その経過のお話ができるのはもう少し先のことになりそうである。

したがって今回は、閑話休題として趣向を変え、柔軟な発想が要求される、多様で不可思議な「古典」の世界へご案内したいと思う。

焚書坑儒

物語は秦の始皇帝の儒家弾圧に始まる。さまざまな政治改革を断行した秦政府に対して批判的だった多くの儒学者を処刑(穴埋め)し、思想の基となる儒教経典を焼却した、悪名高い出来事で、世に言う焚書坑儒である。さらに秦が亡ぶ時にも、保存資料として残されたわずかな経典も宮殿とともに消失した。

劉邦が漢王朝を興し、儒家の弾圧がなくなると、生き残った儒者たちは記憶を頼りに経典の復元を行ったが、当時の国定書体であった隷書で書かれたので、これらを「今文経」という。

一方、劉邦の孫の武帝の時代には、その地を治めていた劉余が、孔子の旧宅を取り壊して宮殿を建てようとしたところ、壁中に塗り込められていた、儒教経典を記した大量の竹簡が出てきた。その書体が科斗文字と呼ばれる篆書以前のものだったため、これを「孔壁古文」あるいは単に「古文経」という。

古文五蔵と今文五蔵

古文経と今文経の内容が同じなら問題はなかったが、かなり違っていたらしく、以後、儒家の間では二派に分かれて論争が続くことになる。

ここで特に問題となるのが五蔵(五臓)の五行配当である。今文五蔵は我々にも馴染み深い「肝(木)・心(火)・脾(土)・肺(金)・腎(水)」であるが、古文五蔵では「脾(木)・肺(火)・心(土)・肝(金)・腎(水)」となっているのである。

この古文説の五蔵配当は儒教経典に限らず、『管子』や『淮南子』など諸子百家の文献にも散見することから、漢代以前にはある程度浸透していたものと考えざるを得ない。

一見、奇異に見えるこの配当も、実は、「上→肺、左→脾、右→肝、下→腎、中央→心」と考えると、解剖学的な内臓配置と完全に一致し、また、仮に「腎は命門の相火を脾に伝え→脾は

水穀の精微を肺に伝え→肺は気血を心(脈)に伝え→心(脈)は血を肝に伝え→肝は精を腎に伝える」と考えたとしても、藏象理論的に大きな矛盾はなさそうである。

五徳	木	火	土	金	水
属性	曲直	炎上	稼穡	革従	潤下
五味	酸	苦	甘	辛	鹹
五方	東	南	中央	西	北
古文五臓	脾	肺	心	肝	腎
今文五臓	肝	心	脾	肺	腎

これまで、医書はおしなべて今文説を採用したというのが通説であり、医書中に古文説を背景に持つ内容が存在する可能性について注目されたことはないが、本当に医書の中には古文説の五蔵配当が見当たらないのであろうか。

背部俞穴

『素問』血気形志篇には独特の背俞取穴法が記載されている。要約すると、①1辺が両乳頭間の長さ(『靈枢』骨度篇では9.5寸)の1/2とする正三角形を作る。②その三角形の頂点を第7頸椎棘突起に当て、その底辺の両端を肺俞とする。③②の三角形の底辺の midpoint から同様に①の三角形を当て、底辺の両端を心俞とする。④③の作業をさらに2回繰り返し、上の三角形は左端を肝俞、右端を脾俞とし、下の三角形の底辺の両端を腎俞とする、という内容である。

ところが、『太素』や『医心方』では同じ条文でも、その脾俞と肝俞の位置が左右逆転し、古文の五蔵配当に対応するように記載されているのである。

『靈枢』背輸篇や『甲乙経』卷三の背俞は、我々も良く知っているとおり、「第三椎→肺俞、第五椎→心俞、第九椎→肝俞、第十一椎→脾俞、第十四椎→腎俞」という順となっているが、これもまた、古文の五蔵配当を左右対称の形に変

化させたものと看做することができるのである。

募穴

募穴の「募」字は、『靈枢』百病始生篇に「或いは腸胃の募原に著く」、邪客篇に「地に林木有り、人に募筋有り」とあるように、本来、「幕(=膜)」に作るべき字であるが、『素問』奇病論篇に「之を治するに胆の募俞を以てす」とあるように、特定の機能を持った孔穴としての意味が付加されるに至る。

募穴としては、『脉経』卷三に「期門・日月・巨闕・関元・章門・太倉(中脘の別名)・中府・天枢・京門・中極」の10穴が見えるのが初出であり、これらは我々が知っている募穴と基本的に同じものである。特に五蔵の募穴においては基本的に背俞の順番に対応しており、同様に解剖学的位置と関連している。

むすび

当然のことながら、医書が基本的に今文説に基づくことについては異議の唱えようがないが、こと愈募穴の臨床応用においては、発想を柔軟にして古文説を採用してみることに、大いなる魅力を感じざるを得ない。

古典に学ぶということは、杓子定規な教条主義に陥ることではなく、視野を広げ現状を打開するための効果的な手段を持つことに他ならない。とくに、伝統を標榜するジャンルであれば、基礎的根柢を手にすると同義であるとも言えるのである。

それに際しては、事実誤認や有意的曲解は注意深く排除するべきであるので、ある程度は歴史や言語学上の基礎を習得しなければならないことは言うまでもない。

(〒980-0845 仙台市青葉区荒巻青葉33-1

赤門鍼灸柔整専門学校 東洋療法教育専攻科)